
メイドさんの出番です!!

紫乃 華陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイドさんの出番です！！

【Nコード】

N8818Y

【作者名】

紫乃 華陽

【あらすじ】

パン屋の娘から、急遽噂の”白い伯爵”の元で働く事となった楓。そこには、「金目狙い」などという言葉は無く平和であった。だが、ある日の事。楓がすっかりメイドの生活に慣れて来た頃に、突然伯爵が誘拐されてしまった。いつもの根気と気合で伯爵を助けに行くと言うのだが・・・。

メイドライフの幕開け（前書き）

少々コメディ方向へと書き換えました。台詞が多い所もありますが、どうぞ広い心で見てください。

メイドライフの幕開け

とある街の屋敷には、街で噂の”白い伯爵”が居たそうだ。その伯爵は未婚のため、やはり女性陣には財産を狙って働きに来る者も少なくは無い。そこでその伯爵は自ら雇用するようにし、体力、知力、忍耐力のある女性を選んだそうだ。

最近こいずみは女性、というよりは少し若い女子を雇用したらしい。名前は小泉楓かえで。出身も育ちもこの街であり、生まれ持った体力がある。

パン屋の娘からいきなりメイドにならないかとスカウトされた時は、彼女も断ろうと思っていたが親に押し切られ、噂の”白い伯爵”の屋敷の前で今現在佇んでいるのだ。

確かにパン屋よりは給料も良いとは思うが、面接も無しにメイドにならないかと言われても戸惑うのは当然である。だからと言って、折角の誘いを断るのも少し悪いと思い、本人も決意したらしい。

大きな門の右側の呼び鈴を鳴らすと、屋敷の中からは若い執事とメイド長らしき人物が現れた。二人とも二十代後半から三十代程に見える。二人は楓の前に来るとにこり微笑み、

「小泉楓さんですね？お待ちしておりました。」と執事の方が言っ

た。
「私は篠田と申します。執事長を勤めております、よろしくお願い致します。」

「雪野です。メイド長を勤めております、これからよろしくお願ひしますね。」

軽い自己紹介をして二人は楓を中へと案内した。

楓は、庭に綺麗に咲き誇っている薔薇を見渡していた。ここが一般庶民とは違う所などと考えていた。その間に、無駄に大きい扉の前に到着していたのだ。

あまりの大きさに楓は目をぱくりさせる。そんな楓を雪野は可愛いものを見るようにふふと笑いながら見ていた。

家の中も今までに見た事が無いような広さで、ここを伯爵一人が支配していると思うとどれだけ偉大だかを楓は思い知った。そのため、伯爵への挨拶へ行く途中で左右に顔を動かしてばかりいた。

「ご主人様のお部屋はずつと奥にあります。後で雪野さんが他の部屋について教えてくれると思いますので、なるべく早く慣れてくれればと思っております。」

「は、はい……。」

自分にとっては慣れない広さだったために、心底不安も抱いていた。そんな楓の背中を雪野は軽くぽんぽんと叩いた。

「ご、ゴッドマザー……!!」

そう言いたくなったのは抑え、楓は一人で感動していた。この頃から楓にとって雪野は”神のような母親”になったのであった。

「ご主人様、楓さんをお連れしました。」

さっきまでの緊張のほぐれはまたピンと張り、中からの返事が来るのが少し怖かった。何故なら楓の脳内では、『伯爵』真面目で怖いというイメージがあつたからである。だが、中からの返事は思ったよりも明るく、少し幼い高い声だった。

「どうぞ、入って下さい。」

その声を聞いた楓はホツとした。

ドアが開いて、視界に現れたのはちゃんとした青年。ブロンドの髪に白いスーツを着ていて、まるで天使を思わせるような……童顔だった。（恐らくハーフ。）

そんな伯爵を見た楓は驚いた。立った時同い年位の身長ではあるのだが、顔が幼い声も幼い。イメージとは全く違ってはいたものの、全く逆の存在だったのだ。

「初めまして、私は神宮寺琥珀じんぐうじ こはくと申します。今日からよろしく、楓さん。」

そう言うてにつこり笑った。とても驚いていた楓だが、とりあえずお堅い挨拶をして琥珀の部屋から出た。

「どうでした？伯爵は。とても可愛らしい人だったでしょう？」

「こら、雪野……。」

「あら失礼。」反省の色は無く雪野はクスクスと笑っていたのだ。

挨拶した後は、篠田が言ったように雪野が部屋の案内をした。

部屋はアパート一部屋の二倍くらいで、タンスやクロゼット、バス
タブにベッド、机などと必需品が揃っていて一人分の部屋にしては
快適だった。

「ここが貴女の部屋です。今日のお仕事は、貴女の部屋を整理する
事から始めましょう。」

「解りました。」

「部屋にあるものは好きに使っていいですからね。」

と言い、雪野は楓の部屋から出て行き、他のメイド達に指示を出し
ていた。

「さて、始めますか……。」

まずは、藍色の制服（メイド服）を着て、エプロンを着けた。エプ
ロンは現代向けなのか、フリルが付いていて可愛いデザインだ
った。制服は古風である。カチューシャを着けたら、まずは鞆に入
っている寝巻きや下着、念のためにある普段着をタンスの中に入れ
た。クロゼットにはコートと今日来ていた上着と鞆を入れた。

机には、メイドのためのマニュアル本と羽ペンが乗っていた。引き
出しには日記帳があり、『ここに本日あった事を記しておく事』と
書いてあった。大分丁寧である。

部屋も意外と小綺麗で、掃除なんてたまにすればいい位の綺麗さで
あった。

やる事を無くした楓は、雪野の元へ行き何かする事がないか尋ねた。
「そうですね……。では、図書室と資料室に本を運んでいただ
こうかしら。」

きちんとした初仕事に、楓はやる気を見せた。

「任せて下さい！……で、その本は何処にあるのですか？」

すると雪野は「ここですわ。」といい、ダンボールに詰められていた新書を楓の前へ運んでいった。

「此方は図書室。で、此方が資料室への本です。少しずつでいいので運んでいただけないかしら？」

その本の山を見た楓はたらりと汗を流したが、初仕事で、しかも力仕事なので気合を入れ直した。

「分かりました。頑張ります!!」

そう言うとき雪野は心配顔から笑顔になり、「よろしくね。」と部屋を後にした。

「うーん・・・十冊ずつ持ってけば平気かな・・・。」

両方百冊、計二百冊程ある。力仕事が得意な楓だが、流石に多量だ。持てる分だけ持って行き、図書室の本は全て片付いた。そして、資料室へ運んでいく途中だった。

「手伝いましょうか？」

後ろから声がした。横にひよこつと顔を覗かせたのは、琥珀だった。「伯爵！？だ、大丈夫です。力仕事は得意なので。それに伯爵に持たせる訳にはいきません・・・。」

と遠慮する楓に対し、

「伯爵じゃなかったらやらせてくれるの？」笑いながら、楓の後に続いた。いつの間にか敬語じゃなくなっていた。

「え、それは・・・あ、ああ!!」

バランスを倒してしまつたのか、後ろに転倒しそうだった。それを、丁度後ろにいた琥珀が支えたのだ。

「大丈夫?・・・やっぱり手伝つた方が良かったんじゃない?」と笑った。

「ほ、本当に大丈夫ですから!!」

と言つたが、琥珀は言う事を聞かずに半分以上の新書を持った。

「伯爵、私が雪野さんに怒られますから・・・!」

「平気だよ。僕が言っておくから。」

何を言つても手伝う気でないらしいので、楓は諦めてしまった。

資料室は掃除をしていないのか、埃っぽくあまり綺麗とは言えなかった。

「ここ、掃除をされていないんですね……。大丈夫なんですか？」

「いいんだ。ここは結構プライバシーに関わる場所だから、あんまり人を入れたくないんだ。」

「そうなんですか……。」

二人が新書を入れ終えた時、琥珀が言った。

「ここには、今まででは僕以外に篠田さんと雪野さんしか入れた事ないんだけど、君は雪野さんに頼まれたから特別だね。」

「そ、そうなんですか?!」

「うん。だから、今度からはここに入って来ていいからね。後、掃除も頼もつかない。」そういつて、また笑顔を見せた。

「……。いいんですか、本当に……。」

「ああ。あんまり弄らなければね。じゃ、僕はここで調べたい物があるから。」

「あ、はい。失礼しました。」

楓は納得がいかなかった。琥珀と雪野と篠田しか入れた事の無い資料室に、何故自分だけ入れたのが疑問に思った。だが、何もわかっていないのでとりあえず、その問題は放置した。

その事に深入りするのもしけない気がしたため、他はもう聞かない事にした。

「雪野さん。終わりました。」

「早いですね。ずるでもしましたか？」

その笑顔が恐ろしい。

「い、いいえ、色々やり方を考えながらやっていたもので……。」「と楓は苦笑するしかなかった。

流石に、伯爵に手伝ってもらったなどと言う訳にもいかない。本当は処罰をうけなければいけないはずだったが、思わぬ結果になってしまった事を楓はそこで後悔した。

「後はもう無いと思います。他のメイド達にもう色々やっていたので、後は皆さんと一緒に食堂へ行って下さい。」

「分かりました。」

食堂は長い廊下を渡った先にあり、雇われているメイドは少数なのに食堂は広いのだ。楓が恐る恐る中に入ってみると、中には十五人中八人程のメイドがもう先に座っていた。

「あ！新人さんだ！」

一番最初に反応したのは身長の小さいメイドだった。

「楓ちゃんって言うんだよね？私は優奈^{ゆな}っていうの。よろしくね。」と笑って見せた。

「よ、よろしく・・・。」

「こら、新人さんを困らせちゃ駄目でしょ？」

次に近づいてきたのは眼鏡の三つ編みの女の子だった。

「私は咲^{さき}。ごめんね、この子がいきなり・・・。」

「ううん、大丈夫。よろしくね。」

二人が近づいてきたからか、他のメイド達もわんやわんやと集まってきた。

明るい性格からしつかりした性格までのメイド達が自己紹介を始めてきたのだ。先程の優奈は十六で、咲は十八。大体は楓と近い年の子ばかりであった。

「ふう、終わった・・・。ん？」

「何々？一体何事？」

「新人だつてさ。」

最後の三人が入ってくると、楓の周りを囲んでいたメイド達は急いで自分の席へ戻った。

楓は何が何だかわからない様子だったが、とりあえずその三人にも挨拶をした。

「楓です。今日からここで働く事になりました。よろしく願います。」

目の前にいた三人は、一瞬驚いたもののすぐに笑顔になり、

「よろしく。私は副メイド長の七海^{ななみ}。」

「私はメイドの中の幹部生^{あゆみ}って所かな？実花^{みか}だよ。よろしくね。」

「同じく、幹部生の歩美^{あゆみ}です。よろしく。」

食事を食べ始め、三人と慣れ親しんだ後は普通に会話をしていた。

「へえ、メイドにも位があるんだね。」

「そりゃ、メイド長とかいつかは辞めないといけないからね。その後誰になる？ってなったら困るでしょ。だから、こういう風に副メイド長、メイドの幹部^{あゆみ}みたいにしてるの。」

「だから、皆ささつと離れたんだ。」

「そういう事。でも、普通に話していいからね。分からない事があつたら何でも聞いてね？」

「ちよつと図々しいかもしれないけど、そうさせてもらうね。」

こうして、食事の時間は楽しく過ごせたのだという。

それぞれ、自室に戻ったメイド達。楓はお湯の入ったバスタブに身を沈めながらメイド達の名前を覚えていた。

「結構覚えるの大変だな……。慣れれば大丈夫だと思うけど。」

最初に来た時の不安は嘘だったのかと思う程に、次の日を楽しみにしていた。

入浴を終え、寝巻きに着替えた後は記録帳（日記帳）に出来事を書いて寝た。

『メイドライフの幕開け』という見出しから始めて……。

メイドライフの幕開け（後書き）

少し誤字を直しました。誤字、脱字があれば言ってもらえると幸いです。

皆が鬼に見えるのは、私だけでしょうか・・・？

「楓ー、こつちお願いーい。」

「はいはい、只今ー！！」

「楓ちゃん、そつち終わったらこつちお願いしていいかな？人手が足りなくて。」

「分かりましたー！！これが終わったらすぐに行きますからー！！」

朝からずつとこの調子であちこちに向かう楓を見て、他のメイド達も驚いていた。実は、本日の最初の仕事により、幹部や副メイド長に見込まれたのだ。楓は女にしては力があるという事でこうなってしまったと言っても良いだろう。

「凄いね、楓ちゃん。副メイド長達から仕事を貰ってるよ・・・。」

「そりゃ、朝あんな事があつたんだから当然でしょうね・・・あれは伝説よ。」

楓のメイド仲間である優奈と咲が忙しそうな楓を見て言う。咲の言う伝説とは、先程言つたように本日の最初の仕事とも言える事だ。

朝、メイド達が朝飯を食べ終わった時の事だった。

*

「食器、どんどん持ってきて。」

「はい。」

食器洗いが係のメイドに頼まれて食後の食器を運んでいるのは、十五人中三人のメイド達だった。

十五人分の食器を分けて持つていけば問題はないのだが、一人の食器を持ったメイドが躓いてしまい、そのまま転倒・・・

「うわあー！！・・・つとー！！おつとつと・・・。」

のつもりが近くにいた楓が皿を両手でキャッチし、転倒しそうになったメイドを足で支えてセーフ。

当然、周りからは「おおー」と声を揃えてそれと同時に拍手が巻き起こった。その後は皿も洗えて、転倒を免れたメイドは怪我無く全て無事に終わった。

*

このような出来事があったために副メイド長に見込まれ、今に至るわけである。誰にも真似が出来るわけではないので、その力を仕事に生かせないかと次々と仕事をやらせていると言う訳だ。この出来事はその夜にメイド達の記録帳に刻まれるだろう……。

「えーと、次は庭の掃除か……はあ……。」

溜め息を吐きながらも仕事は仕事なので、楓は庭に向かった。庭の掃除は執事の篠田から教えてもらうために行くのだという。

「篠田さん？」

「楓さん。お疲れ様です。」

「あ、お早うございます。」

篠田も丁度今来ていたらしく、物置小屋から出て来た。どうやら中の騒動を知っていたらしい。

「ではまず、掃き掃除からですね。今の時期だと落ち葉がそこらに落ちているので、それを掃いて下さい。範囲は庭内だけでいいので終わったら、私は部屋にいますので来て下さいね。」

「解りました。」

篠田は笑顔で室内に入っていく、いざ始めようと思った楓はやる前からどつと疲れていた。

屋敷の掃除もあったが、まず庭内だけと言われても、庭内が広すぎるのだ。庶民の庭の何倍もある。始めてきたときはじっくり見ていなかったが、屋敷から出た時は門が遠く見えた。ここを一人で掃除をしるという篠田を鬼だと思い始めた楓であった。

「気楽にやってけばいいかな……。」

そう言いながら、屋敷の近くにある落ち葉から掃いていった。

太陽はまだ南より少し左の位置にある。雲ひとつ無い晴天だった。空を見ながらぼんやりしていた楓を、伯爵である琥珀は窓から顔を出して面白がって見ていた。

「おサボりはいけませんよー。」

笑いながらそう言う琥珀の声にはつとして、楓の思考は現実に戻る。「すみません、暖かくてついっい……。」

はにかみながら顔を下に向けて掃き掃除を続行した。

それを見ると琥珀はますます面白がってクスクス笑っていた。それに気付いたのか楓は怪訝そうな顔をして琥珀を睨んだ。

「何か可笑しいですか？」

そんな顔をされてもにこにこしながら自分を見ている琥珀に少し苛立っていた。

「君の反応が面白くてね……ふふっ」

どうやら笑いを堪えているらしい。楓はそんな伯爵に知らん顔をしながら掃き掃除を続けた。

いつの間にか半分以上まで掃除が進み、後少しで終わりそうだった。楓は掃いていったところまでを見て「よし。」といい、伯爵の部屋の窓の方を見ると伯爵はまだ顔を覗かせていた。それも笑顔で。

「何なんですかさつきから……。お仕事はなさらなくて平気なんですか？」

「君が掃いている間に全部終わらせた。君ももうすぐ終わりそうだね。」

イライラが顔に出ている楓をあんまりにも面白そうに見ているために、楓も怒るところか呆れてしまった。

「何がそんなに面白いのかしら……。人の顔を見て笑うなんて失礼な人。」とボソボソと言っていた。

「何か言った？」

「いいえ、何でも。」

屋敷内の掃除で疲れている楓にとって庭掃除は結構な休憩であった

が、琥珀と話す事でまた疲れが溜まっていったのだ。体力は人並み外れてはいるため、まだ少し仕事が出来そうであったがそろそろ限界に近かった。体力、精神両方ともどっと疲れて休みたいとは思っていたが、こんな事では辞めさせられてしまうと思い後少し頑張ろうと内心思っていた。

掃き掃除がやつとの事で終わった所でもう既に楓はへとへとになっていた。

伯爵は窓から姿を消し、安心してその場で眠ってしまった。

「やれやれ・・・。」

出かけようとしていた琥珀が羽織っていた肩掛けを楓の肩に掛けた。後ろにいた篠田は微笑み、

「琥珀様は優しいですね。」と言った。

その時、琥珀は内側の胸ポケットに入れていた紙を起こさないように楓に持たせた。

「そういう風に見える？」

笑いながら言う琥珀に、篠田は苦笑した。「行きましようか。」といい、門の近くでそのまま寝かせた。

「・・・ちゃん・・・でちゃん・・・楓ちゃん、起きて。風邪引いちゃうよ?」

「んん・・・?」

楓が目を覚ますと、目の前には幹部の実花が心配そうな顔を見ていた。

「実花ちゃん・・・。あれ、私・・・?」

周囲を見渡す途中、手に持っていた手紙に気がついた。

「とりあえず部屋に戻ろう? 曇ってきたし・・・。」

「うん。」

室内に入って見ると朝忙しかったメイド達の姿は無かった。恐らく、

各部屋の掃除に向かったのだろう。

「その手紙は何？」

「わかんない……。起きたら持ってた……。」

四つ折りになっていた手紙を広げて読んだ。すると、楓の顔が青くなっていた。

「どうしたの？・・・見せて。」

手紙を持っていた手には力が無くすぐ取る事が出来た。元に戻ろうとしていた手紙をきちんと広げて、声に出して読み始めた。

「何々・・・？」『この度は庭掃除の後眠ってしまい、そのまま他の仕事を放棄していた楓さんに処罰を与える事とします。食事が終わったら私の所へ連れて来て下さい。琥珀』・・・うわぁお・・・。」
楓は声にならない悲鳴を上げていた。そして絶望感に陥り、その後食事もともに食べられなかったと言う。

流石に心配になった咲達は懸命に楓を励ましていた。

「大丈夫だよ、楓ちゃん。初めてなんだから失敗も当たり前だし、ね？」

「うつん……。初めてだからちゃんと出来ないといけないの……。だって、ここに来てすぐに処罰を受けるなんて……。しかも居眠りで仕事放棄っていう理由で……。」

生気も無く、口から魂が出ているようにも見えていた。そんな楓に、副メイド長の七海は溜め息を吐いた。

「楓、失敗なんて誰にでもあるよ。それに初めて来た時に処罰を受けたのはあんなだけじゃないんだからさ。そんなに気を落とさないで。」

「・・・すみません。」

他のメイド達にも励まされて、もう落ち込むのも失礼だと思い始めた頃には琥珀の仕事部屋へと向かっていた。

大丈夫、大丈夫と自分に言い聞かせてノックをし、「どうぞ。」という声が聞こえた後に扉を開けた。中には琥珀が座っていて、楓を待ち構えていたようだった。

「やあ。よく眠れた？」

「ええ、まあ。おかげさまで……。」

「やっぱりこの人といるとイライラするな…… そう思い、目をそらして次の発言を待っていた。」

「で、君の処罰なんだけどね……。」

「そこまで聞いた楓は、自分の体が大きな鼓動のせいで揺れている事に気づいた。白い伯爵、琥珀の屋敷で働き始めてから初めての処罰である。とても緊張していたのだ。」

「君には明日の買い物に付き合ってもらおうかなと思って。」

「あまりにも処罰とは言えない処罰だったので、「ふえ？」という間抜けな奇声を漏らして啞然とする。そして、思い切りホッとした。処罰は伯爵が恐ろしいイメージがあったように、もっと酷なイメージがあったからである。だが琥珀の事なので、何かあるに違いないと油断はしないように用心した。」

「明日の午後一時に行くんだ。わかったね？」

「承知致しました。」

「うん。部屋に戻っていいよ。」

「笑顔で言う琥珀は何だか楓を追い出しているようにも聞こえた。」
「失礼しました。」とやはり怪訝そうな顔をしながら伯爵の部屋を出る。

「買い物か……。何かあるのかな？」

「“買い物”と聞いても別に普通な気がしてならなかった。」

「処罰が買い物なんて聞いた事が無い、そう思いながら部屋に向かったのだった。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8818y/>

メイドさんの出番です!!

2011年11月27日17時38分発行